紀　　要

第 14 号

2001. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

滋賀県栗太郡栗東町地山古墳の近世窯跡について

稲　垣　正　宏

1．はじめに

地山古墳の所在地は滋賀県栗太郡栗東町岡で、栗太郡衙と推定される岡遺跡の西側に位置する帆立貝形の前方後円墳である。1990年度の発掘調査[1]によると後円部径66m、前方部幅33m、長さ22m、墳長88m、墳丘に沿う周濠の幅は後円部で13m、前方部側面で15m、前方部前面で10m、周濠の深さ２m、周濠を含めた全長は110mの規模となる。

1990年度の発掘調査では、周濠の周囲に幅２m程度の調査トレンチ(T－５～T－15)を設定して墳丘と周濠の規模を確認した。後円部の東・北斜面にあたるT－５(B・C・D)、T－８(A・B)、T－10と後方部南斜面にあたるT－11からは近世陶磁器・窯道具等がコンテナ４箱出土した(図１)。遺物の大半は墳丘上面の堆積土からの出土で、特にT－５からは全体の半分程度の遺物が出土した。墳丘上部の発掘調査が行われなかったこともあり窯体の確認は出来なかったが、出土品の分布から後円部墳丘の東斜面に窯体があった可能性が高い。この存在が推定される窯跡を「地山窯」と仮称したい。

2．遺　物

(1)「地山窯」で生産された可能性のある陶器(図２・図３)

①筒碗

図２―１(以下図番号省略)は、T－５C出土で推定口径7.6cm、器高4.8cm、高台径3.85cm、外面は口縁端部から高台脇まで、内面は全面施釉される。釉は透明、胎土は緻密で焼成は良く色調は薄い灰黄色である。外面口縁端部に幅1.1cmの圏線の痕跡がある。２は推定口径7.0cm、内外面に施釉される。釉は透明で大きな貫入がある。胎土は緻密で、色調は薄い灰黄色である。胎土は緻密であるが焼成は１に比して悪く、軟らかい。色調は薄い灰黄色である。３は、T－５C出土で、内外面に施釉される。釉は透明、胎土は緻密で焼成は良く色調は薄い灰黄色である。外面に褐釉で模様が描かれる。これらの筒碗は信楽近世窯採集品、蒲生郡蒲生町石塔窯出土品(図10)[2]に類似品がある。

②丸碗

４は、T－５D出土で、底径3.3cm、胎土は灰白色で緻密、釉はやや濁り、釉の上からの色は緑味灰色、小さな貫入がある。５は、T－10出土で、底径3.6cm、胎土は灰白色で緻密、釉はやや濁り、釉の上からの色は緑味灰色、小さな貫入がある。これらは信楽近世窯採集品、蒲生郡蒲生町石塔窯出土品、三重県阿山郡阿山町伊賀焼弥助窯(図10)[3]に類似品がある。

③小杉碗

６は、T－５C出土で底径は5.0cm、底部のみの残部であるが、形体は杉形(逆台形)で、畳付以外施釉、胎土は灰色で緻密、釉は灰黄色で細かい貫入がある。茶色の鉄絵で口縁外面表裏に草文が二対描かれる。信楽近世窯採集品、三重県阿山郡阿山町伊賀焼弥助窯(図10)に類似品がある。

④端反碗

７は、T－５C出土で、口径11.0cm、胎土は灰色で緻密、釉は透明で釉の上から見た色は緑味灰色で大きな貫入がある。

⑤香炉

８は、T－11の周濠埋土からの出土で、口径は10.5cm、内外面に製作時の轆轤目がめだつ。胎土は黄灰色で軟らかく外面と口縁内面に施釉される。釉はあまり溶けておらず白濁している。９は、T－５出土で口径10.1cm、外面と口縁内面に施釉される。胎土は薄い黄灰色で硬く、釉は透明で光沢がある。これらは蒲生郡蒲生町石塔窯出土品(図10)に類似品がある。

⑥鉢

10は、T－５出土で、小片のため口径不明。胎土は白色砂粒を僅かに含み色調は薄いモスグリーンで釉は透明である。11は、T－５C出土で小片のため

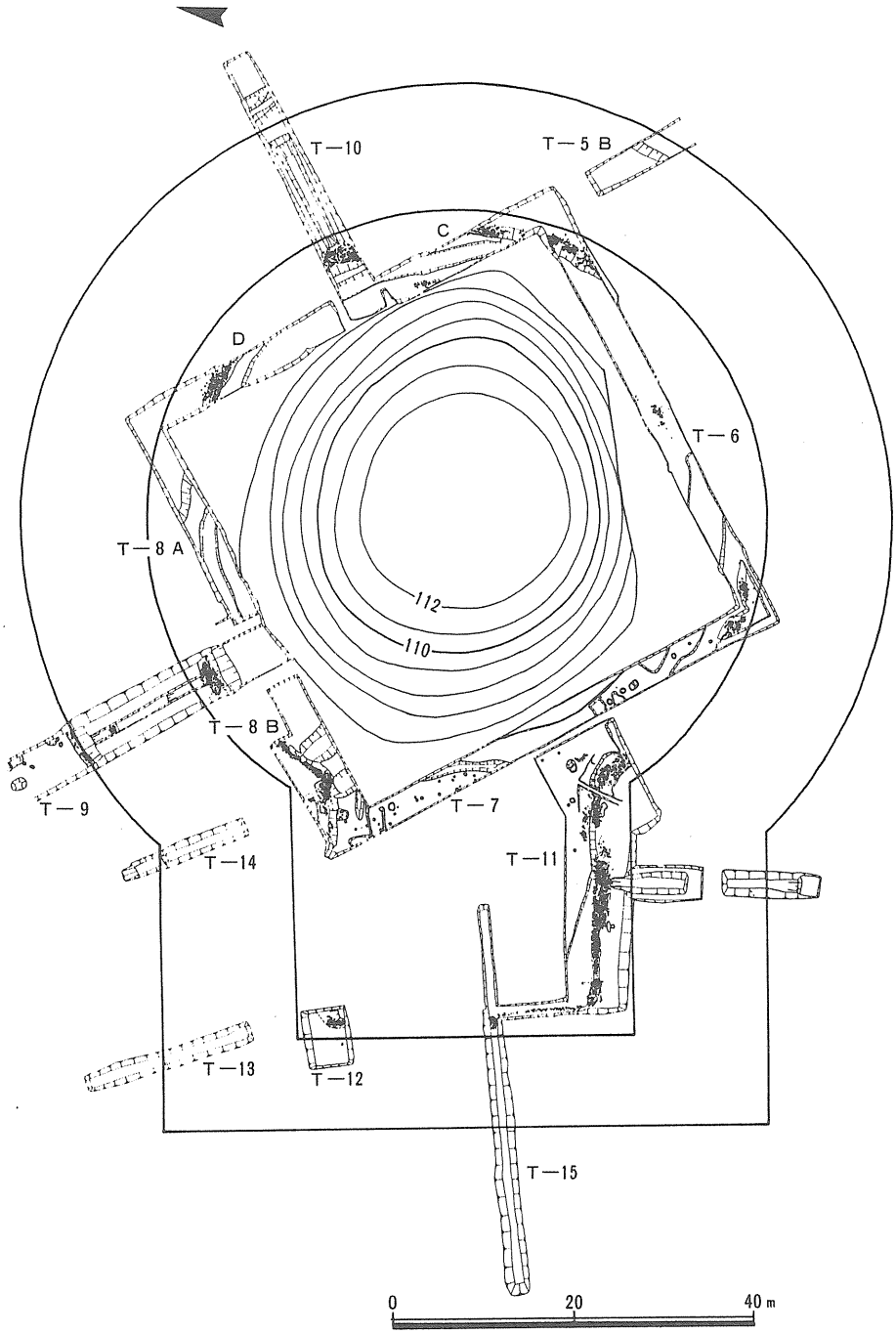

図１　地山古墳トレンチ配置および遺構図

口径不明。胎土は白色砂粒を僅かに含み、色調は薄いモスグリーン。釉は透明である。釉・色調は10によく似ている。12は、Ｔ－５Ｂ出土で底部のみの遺存である。小片のため底径不明。焼成が悪く、軟らかい。釉は溶けていない。高台は削りだしで、断面は四角い。内面に轆轤成形時の細かい筋が多く残る。胎土は粒子が細かく、色調は薄い黄褐色である。13は、Ｔ－５Ｂ出土で底部のみの小片で施釉されていない。底径は10.0㎝、体部外面は削り、内面には轆轤跡が残る。底部外面には糸切痕が残る。胎土は緻密で、色調は黄灰色である。14は、Ｔ－５出土で小片のため口径不明。口縁が玉縁状になる鉢である。

胎土は薄い黄灰色で緻密。透明釉をかける。釉の上から見た色は黄味灰色である。15は、底部のみの小片で内面のみ施釉されている。焼成が良くなく、釉も溶けていない。釉色は薄い褐色、露胎部分は薄い黄灰色である。16は、T－5C出土で焼締めで、内面に擂目を持つが、擂目は浅いので装飾かもしれない。胎土は緻密で色調は薄い柿色である。

⑦灯明皿

17は、口径12.4cm、内面と口縁端部外面に施釉される。釉は光沢があり貫入がある。釉の上から見た色は緑味灰色、胎土は緻密で色調は灰色である。口縁端部内面に菊花の浮文がある。菊花の上に貼ピン

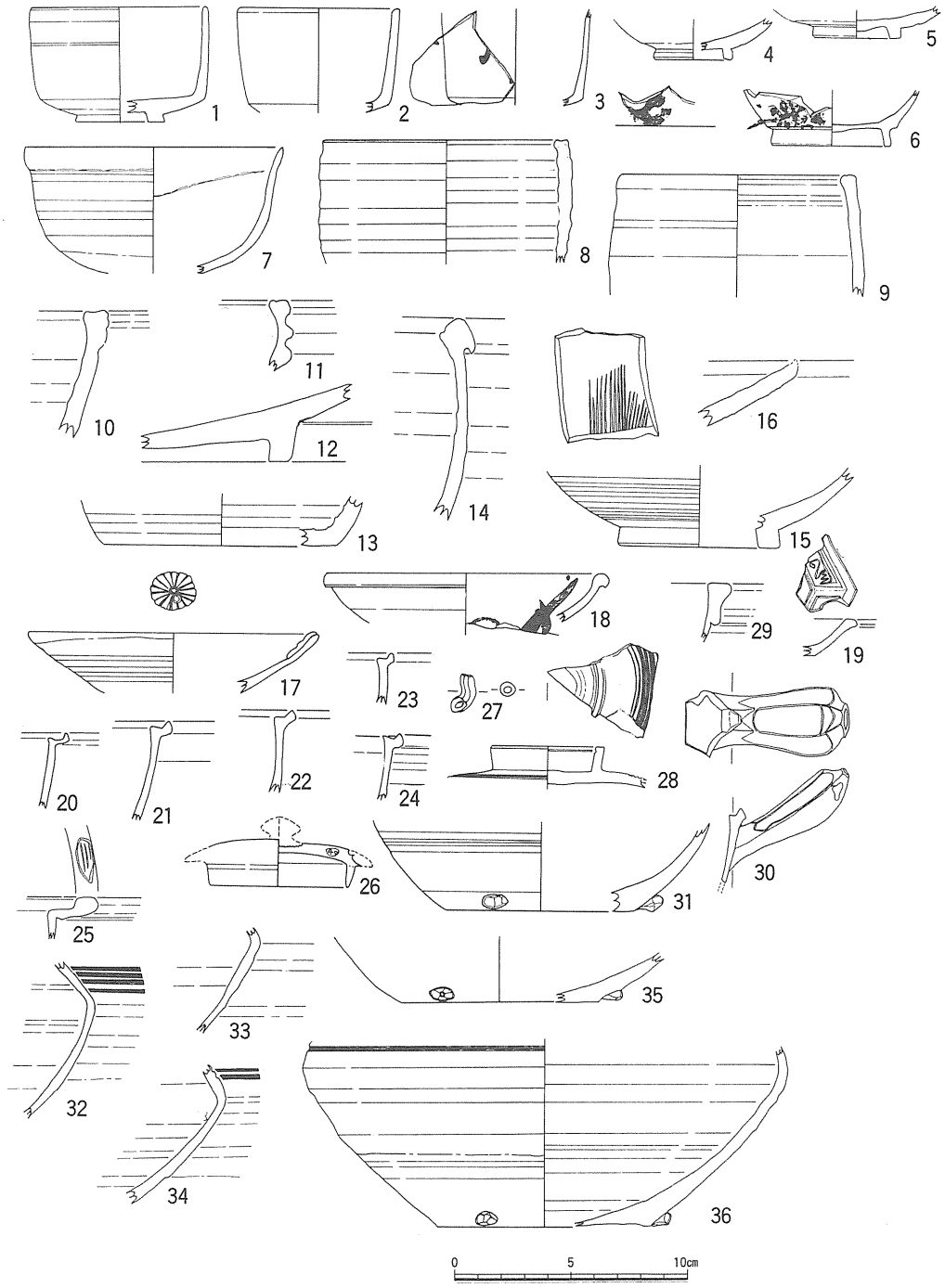

図2　「地山窯」で生産された可能性のある陶器

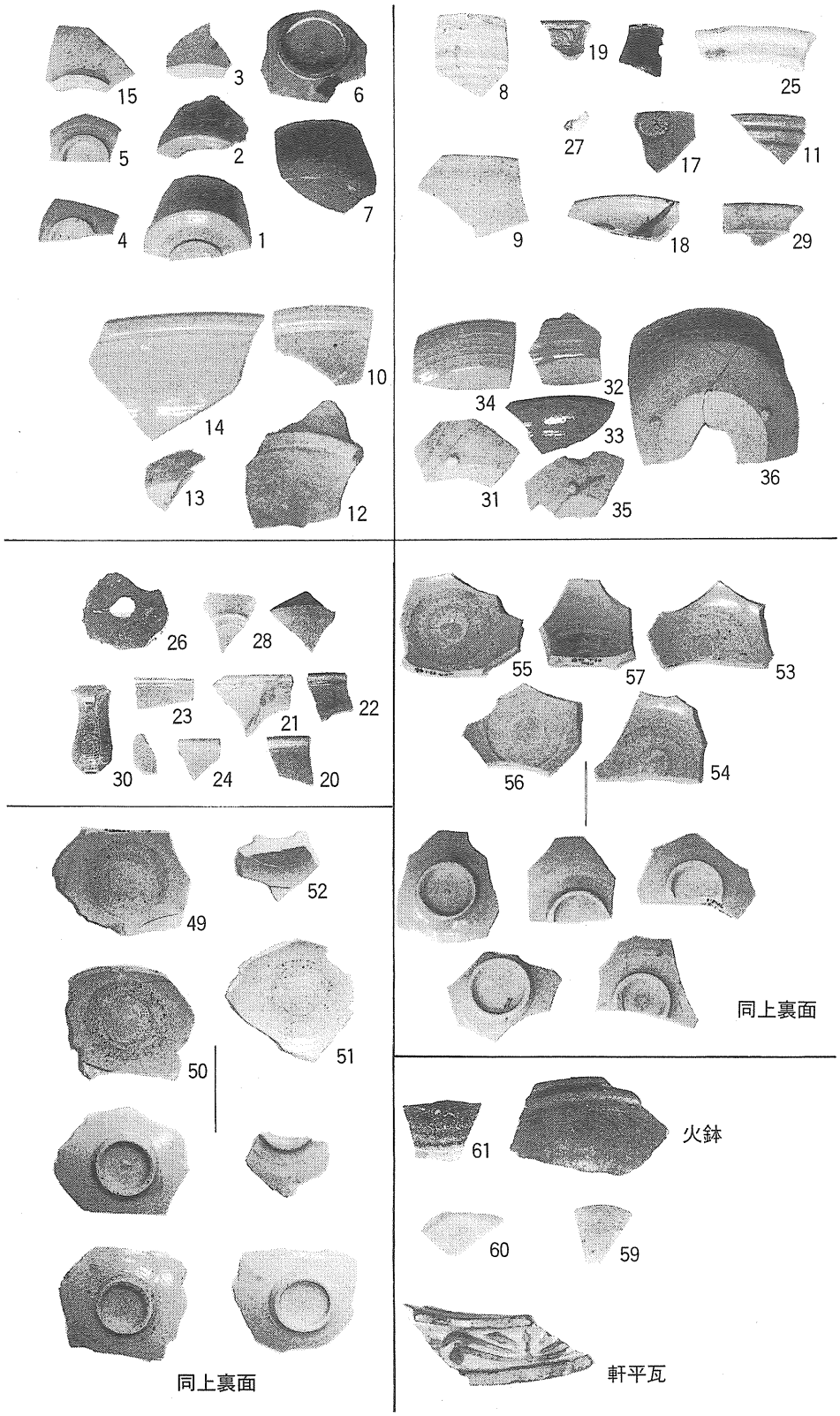

図３　「地山窯」で生産された可能性のある陶器等の写真

(皿を重ねるときに使う円錐型の窯道具)の痕がある。

信楽近世窯採集品、蒲生郡蒲生町石塔窯出土品、三重県阿山郡阿山町伊賀焼弥助窯(図10)に類似品がある。

⑧皿

18はＴ－５Ｄ出土で、口径12.2㎝、口縁端部は外に折り曲げられる。内面に鉄釉で文様が描かれる。内外面に施釉される。釉の上からの色は薄い緑味灰色、胎土は緻密で、色調は灰白色である。19は、型皿で六角形か八角形と考えられる。型作り成形で、内面と体部外面に施釉される。釉の上からの色は緑味灰色、胎土は緻密で、色調は灰色である。

⑨行平

20～24は、行平の口縁部である。行平とは把手が１本付く中型の土鍋のことである。縁端部は蓋を載せるための「受部」がある。21・24はＴ－５Ｂからの出土である。外面は削られ、素焼き状態で施釉されていない。20・22・23は内外面に施釉されるが「受部」は露胎である。釉の上から見た色は緑味灰色、胎土は緻密で色調は灰色である。三重県阿山郡阿山町伊賀焼弥助窯(図10)に類似品がある。

⑩土鍋

25は－Ｔ５Ｃ出土で、土鍋の口縁部である。土鍋は口縁端部上面に２ヶ所把手が付く。口縁は外に屈曲し端部は厚く、端部上面に把手の剝がれた痕がある。素焼き状態で施釉されていない。

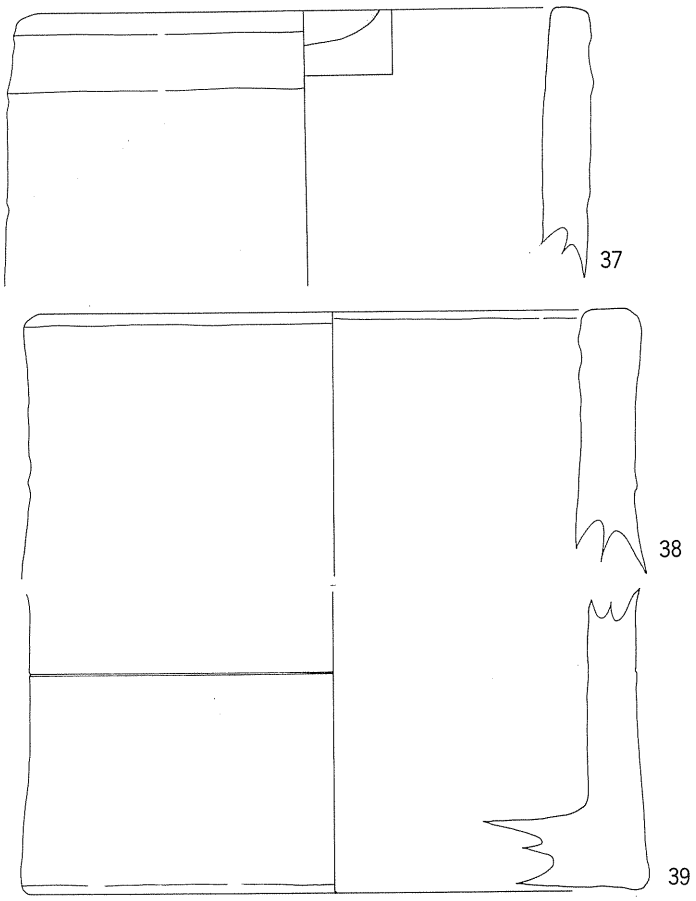

図４　「地山窯」出土窯道具（匣鉢）（Ｓ＝１／３）

⑪土瓶の蓋

26はＴ－５Ｃ出土で、天井部に茶色の鉄釉がかけられる。つまみは欠けている。受け部は貼り付けである。胎土は緻密で露胎部の色調は薄いクリーム色である。蒲生郡蒲生町石塔窯出土品、三重県阿山郡阿山町伊賀焼弥助窯(図10)に類似品がある。

⑫醤油差か水滴の注口

27は、小さな注口である。Ｔ－５Ｃ出土で外面に白釉がかけられる。

⑬行平の蓋

土瓶の蓋との違いはつまみの形で、土瓶は宝珠型、行平は薄い輪状となる。28は、Ｔ－５Ｄ出土でつまみの外側に櫛目の模様がある。釉の上からの色は緑味灰色、胎土は緻密で、色調は灰色である。三重県阿山郡阿山町伊賀焼弥助窯(第10図)に類似品がある。

⑭甕

29は、Ｔ－５Ｄ出土で口縁端部を外方に折り曲げて中央部を凹ませているところが、中世の信楽焼甕に似ている。しかし、鉢の可能性もある。焼成はよくなく断面、露胎部の色調は薄い柿色である。

⑮行平の把手

30は、把手が行平の体部に貼りついた状態の遺存品である。型作りの部品２つを貼りつけて作られる。中空で先端に空気抜きの孔がある。釉の上からの色は緑味灰色、胎土は緻密で、色調は灰色である。釉色は、28と極めてよく似ている。三重県阿山郡阿山町伊賀焼弥助窯(図10)に類似品がある。

⑯土瓶等の体底部

33はＴ－５Ｂ、34はＴ－５Ｄから出土している。外面には轆轤目が目立ち、内面と体部外面に施釉される。外面の釉の上から見た色調は緑味灰色、露胎部の色調は灰黄色、胎土は緻密で色調は灰色である。32と33の色調はよく似ている。34は前者に比して色が薄い。32と33は肩部に凹線が彫られる。36は肩部から底部まで残っている。外面には轆轤目が目立ち、内面と体部外面に施釉される。外面の釉の上から見た色調は緑味灰色、露胎部の色調は灰黄色、胎土は緻密で色調は灰色である。小さな脚が３ヶ所付く。底径は9.1㎝である。以上の出土品は、肩部の屈曲が確認されており、石塔窯等の出土品と比較して土瓶の一部と判断した(図10)。

31と35は、全体に露胎で断面・露胎部の色調は薄い柿色である。31はＴ－５Ｄ、35はＴ－５から出土している。底部外面に小さな脚が３ヶ所付く。底径は8.2㎝である。32～34は体部中位のみが遺存している。31と35は底部のみの遺存である。土瓶・土鍋・行平の底部の形状はほとんど同じであり、この２点が土瓶・土鍋・行平何れであるかについては、判断が難しい。

(2)「地山窯」の窯道具(図４～８)

①匣鉢

匣鉢は、破片がコンテナ１箱ほどある。出土場所はＴ－５で法量のわかるものはわずかである。

図４―37(以下図番号省略)は、口径は23㎝、内径は19.7㎝、器高は、10.7㎝、口縁端部に浅いエグリ

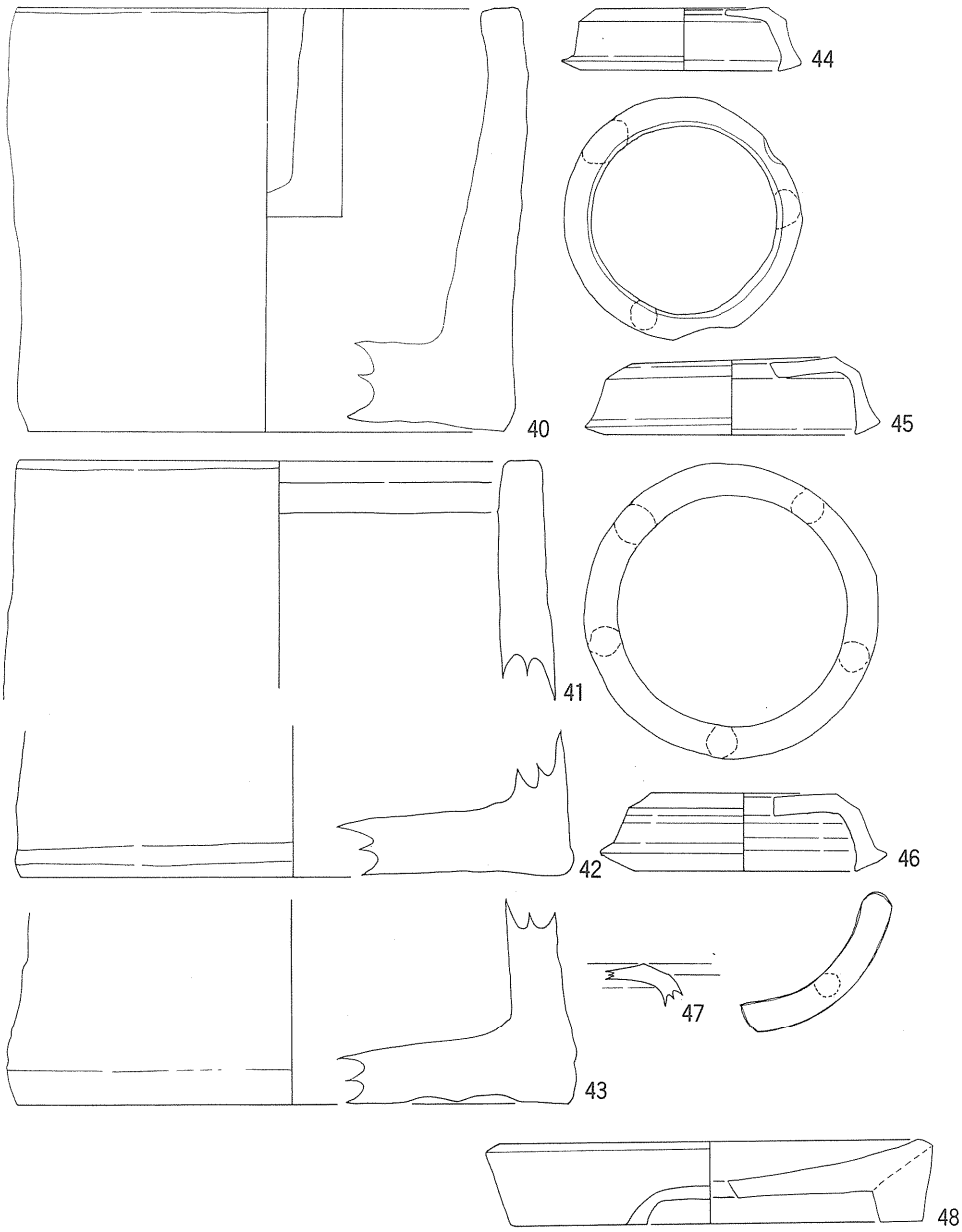

図５　「地山窯」出土窯道具（匣鉢・焼台）（Ｓ＝１／３）

がある。38は、口径は24.5㎝、内径は19.5㎝である。39は、底径は24.2㎝、内径は20.0㎝である。40は、全体の法量が分かる唯一の例である。口径は20.2㎝、内径は17.0㎝、器高は、16.2㎝、口縁から長さ７㎝に及ぶ深いエグリがある。底部外面には糸切痕がある。41は、口径は21.0㎝、内径は17.1㎝である。

42は、底径は21.5㎝、内径は17.5㎝である。43は、底径は22.0㎝、内径は17.8㎝である。匣鉢は、いずれも胎土は大きな長石粒、その他砂粒を多く含み、粗い。長石には、溶解しているものもある。

②焼台

焼台は土鍋の焼台(44～48)と、不明の焼台(48)がある。

44はＴ－８出土で口径8.0㎝、器高2.5㎝、底径9.0㎝である。天井部に円孔があり底部外面に円錐ピンを置いた痕が３ヶ所ある。匣鉢と違って粒子が細かい土で作られる。45はＴ－８出土で口径12.1㎝、器高2.5㎝、底径11.9㎝である。天井部に円孔があり底部外面に円錐ピンを置いた痕がある。46はＴ－５Ｃ出土で全体の１/４の遺存である。口径11.4㎝、

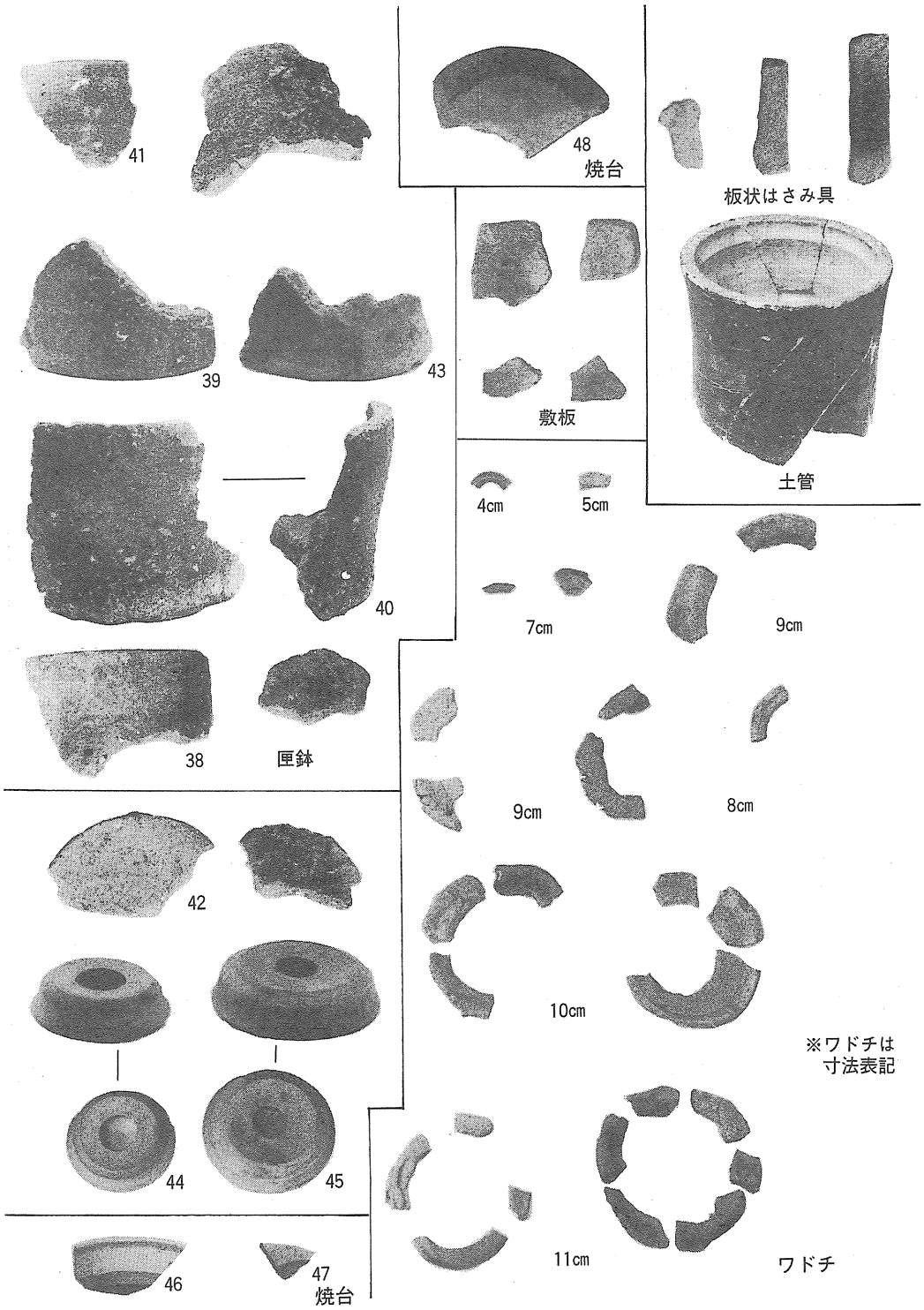

図６　「地山窯」出土窯道具写真（匣鉢・焼台・ワドチ）

器高3.0㎝、底径11.5㎝である。天井部に円孔がある。遺存が１/４のため底部外面に円錐ピンを置いた痕は１ヶ所だけ確認できる。47は、焼台の小片で天井部のみが遺存している。48はＴ－５Ｂ出土で口径17.7㎝、器高3.2㎝、底径116.4㎝である。上下が逆かもしれない。この向きだと高台部に浅いエグリがある。以上の焼台は匣鉢と違って粒子が細かい土で作られる。

③ワドチ（図６・７）

ワドチは茶碗・香炉、土鍋・土瓶を焼成する際、底に敷かれる輪状の粘土紐で、県内・県外の近世窯跡の出土例[(4)(5)]から見ると茶碗・香炉の場合は直径４～５㎝程度以下と小さく、土鍋・土瓶の場合は直径10㎝程度以上と大きい。

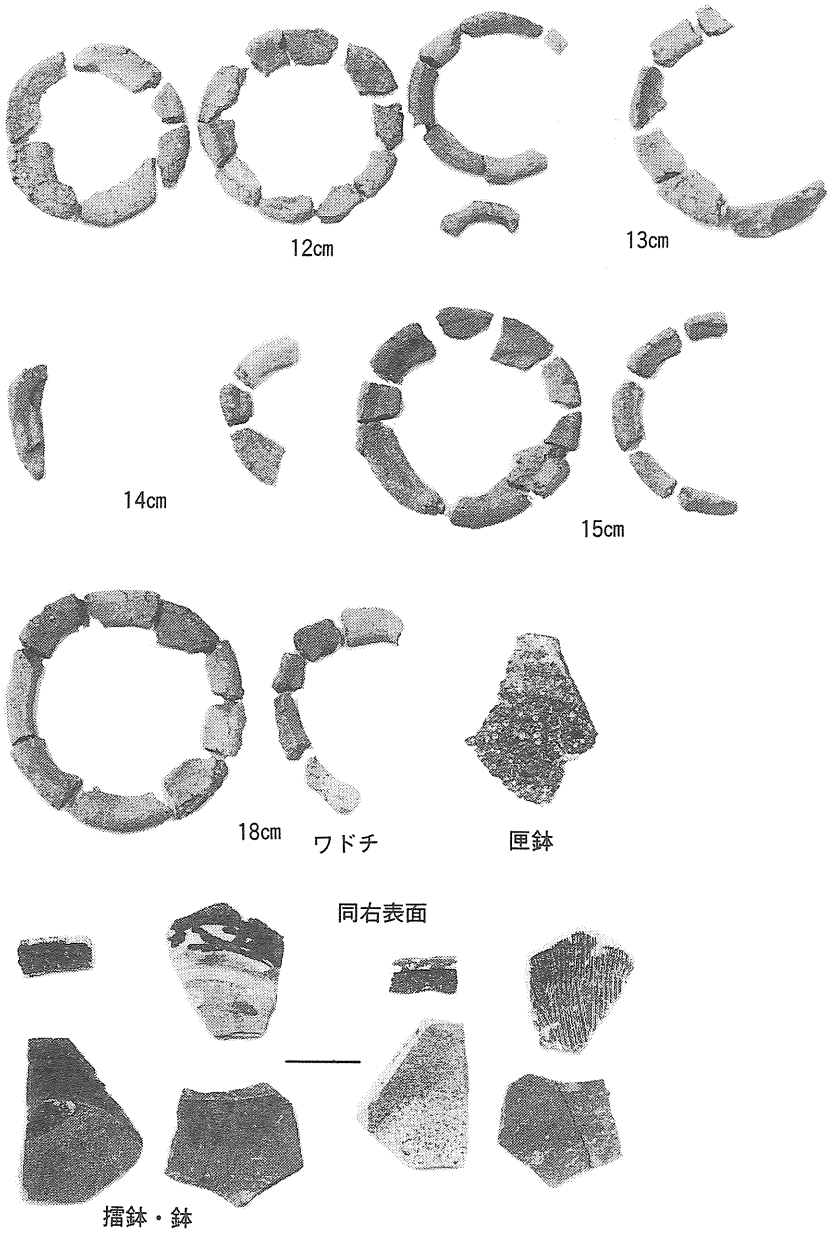

図７　「地山窯」出土窯道具写真（ワドチ・その他）

当遺跡出土ワドチは、口径の大小により12に分類している。図６・図７では輪状に並べての写真を撮っているが、これは推定口径の同じ物を便宜的に並べただけで同一個体ではない。これらの内、口径４・５・７㎝のものは、上部に碗の高台の跡と思われる細い溝があることから図２―１の筒碗(高台径3.8㎝)のような小型の碗に使用されたワドチと考えられる。

口径９～18㎝の９種は上部にやや内方に傾斜した平たい圧痕が残されていることから、平底の煮炊具(土鍋・土瓶・行平等)に使用されたワドチと考えられる。

(3)地山窯以外の生産品(図３・９)

①波佐見系磁器

図９－49～57(以下図番号省略)の９点は、長崎県波佐見町を中心に生産された安価な染付磁器である。波佐見系染付磁器と考えられる。57は体底部のみの個体である。

49～51は、呉須による線が描かれているが口縁部が欠けているため、模様の全体は不明である。57は13.8㎝、器高3.0㎝、高台径4.5㎝である。他の高台径は4.0～4.5㎝である。内面体部外面のみ施釉される。高台および高台内は施釉されない。底部内面は蛇の目釉剝ぎされる。胎土はやや灰味を帯び、釉は白濁し呉須も濁っている。18世紀前半のものである。

②瀬戸・美濃産天目

58は、瀬戸・美濃産の天目である。内外面に濃い褐色の鉄釉がかけられる。素地は黄灰色で軟らかい。大窯Ⅱ期(16世紀前半)のものと考えられる。

③須恵器

59は、杯蓋である。欠損しているが、宝珠つまみを有するタイプで、口縁端部内面に「かえり」がある。外面は口縁端部近くまで削られる。7世紀代のものである。60は、杯身の底部である。焼成は悪く、軟らかい。61は杯蓋である。天井部縁辺に段を持つもので、天井部外面の中心部分のみが削られる。６世紀代のものである。

(4)色調と胎土から見た分類

製品の器種は筒碗から土瓶まで13器種があるが、その釉薬と胎土で大きく分類すると４種類に分けられる。

胎土は灰色で緻密でやや緑味を帯びた透明釉のもの(図２―１・２・４～７・11・17・19・20・22・23・28・30・32～34・36)、胎土は灰黄色で緻密で透明釉のもの(３・14・18)、胎土が淡灰色でやや白

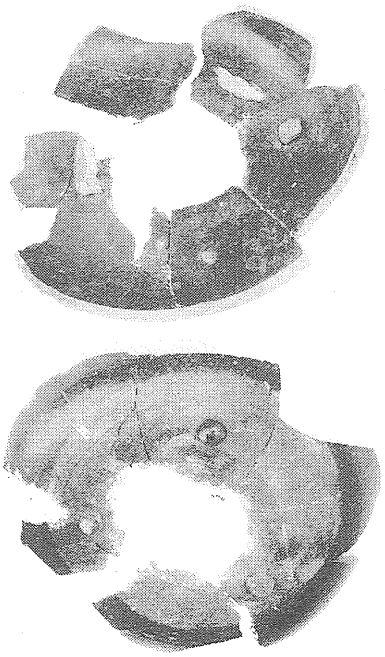

図８　土鍋の底に焼台を置く

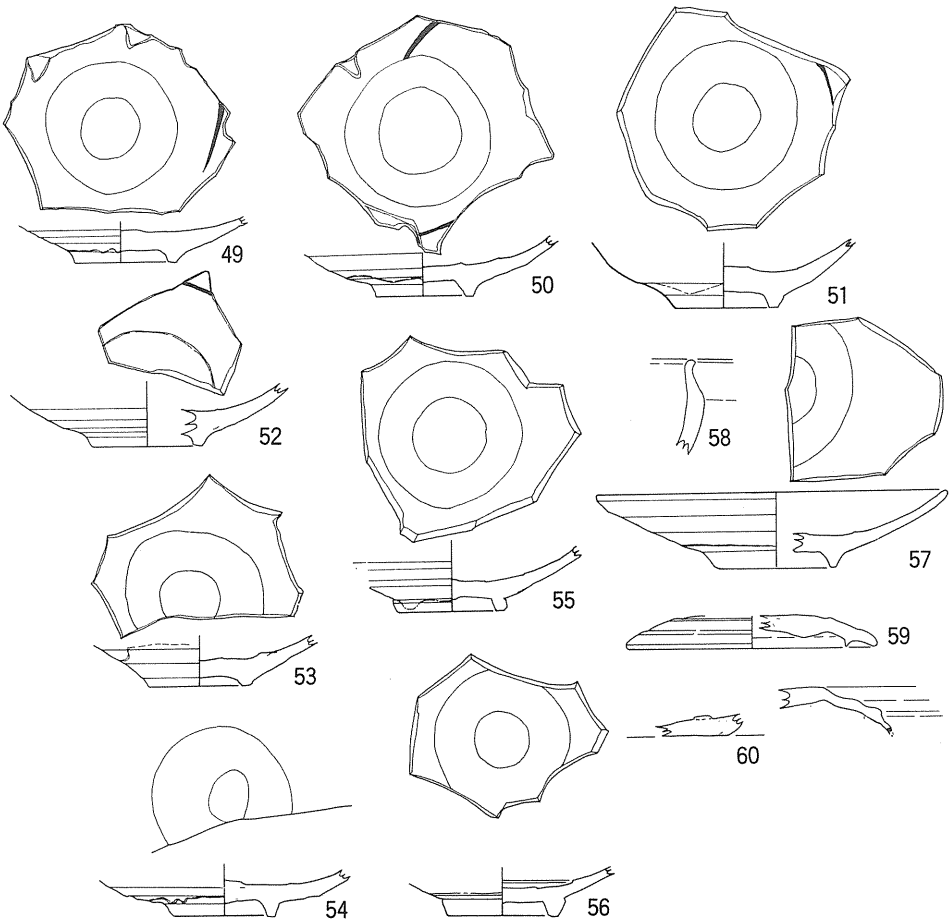

図９　「地山窯」出土の他窯出土品（Ｓ＝１／３）

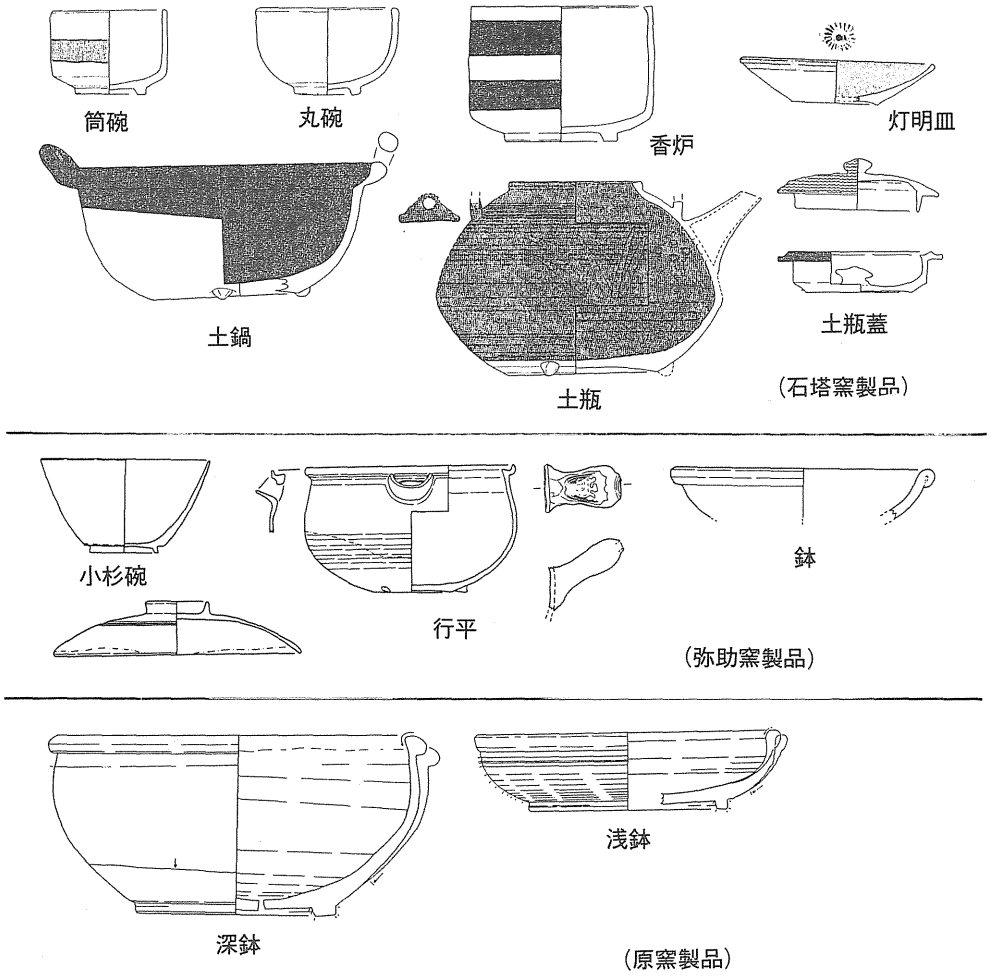

図10 「地山窯」出土製品と他窯製品との比較(S＝1／5)

濁した釉のもの(9・10)、胎土は灰黄色で緻密、褐釉のもの(26)の4種がある。他に焼成不足で釉が溶けないもの(8・12・14)や、素焼き状態で施釉されていないもの(21・24・25)がある。

窯道具については、匣鉢が長石・チャートなどを多く含む粗い胎土であるのに対し、焼台は胎土が緻密、色調は黄灰色で製品に近い。

3．製品と窯道具の考察

(1)はじめに

調査トレンチ出土の陶器製品については、各地に搬出される信楽・伊賀の諸窯製品や蒲生郡蒲生町石塔窯出土品[2]に類似品があり、「地山窯」の生産品とは断定できない。その中で「地山窯」で生産された可能性が高いものは僅かな焼不良品(焼成不足で釉が溶けないもの)と素焼品だけである。

窯道具については近世窯以外で使用されることはなく、また各地に搬出されることもないため「地山窯」で使われた可能性が高い。

以下では、調査トレンチ出土品について、「類似品を生産した県内外の近世窯出土品[6]」や消費地である江戸遺跡の出土品[7]と比較をしながら、その中に含まれる「地山窯」生産品について追求していきたいが、出土資料が少なく窯体についても全く分からないことからはっきりとした結論が出るとは思えない。さりとて調査トレンチ出土の陶器製品の個別観察を報告するのみでは、「地山窯」の近世窯業史上の位置付けも分からないので、「地山窯」生産品として少しでも可能性のあるものについて取上げて分析してみたい。

②「地山窯」生産品の年代と器種について

東京大学本郷構内出土品の編年によると、行平は

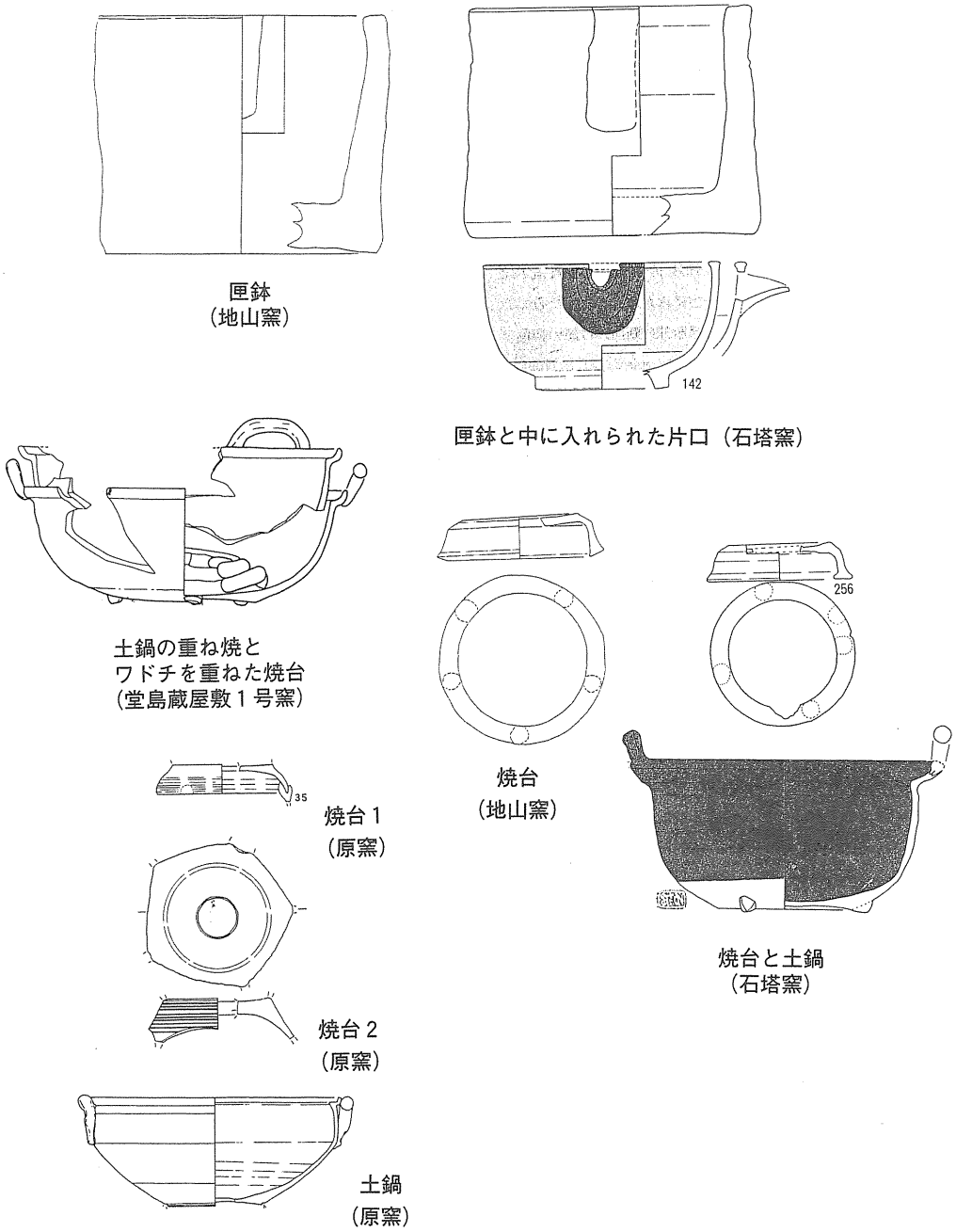

図11　地山古墳の近世窯の窯道具の使用法と他窯の窯道具の使用法との違い（Ｓ＝１／５）

東大Ⅷ―ｂ期（1820年代～1830年代）になって初めて現れる。行平が土鍋より出現時期が遅いのは、堺環濠都市遺跡町[8]や大坂城下町[9]でも確認されており全国的な傾向のようである。調査トレンチ出土品の内行平には素焼き状態（21・24）のものがあり、「地山窯」生産品の可能性が高いことから同窯の稼動年代を知りうる資料となる。

また、窯道具の内土鍋を重ね焼するときに用いられる土鍋の焼台（44～47）は、18世紀末から19世紀初頭にかけて稼動した「蒲生郡蒲生町石塔窯」とピークが18世紀中頃と19世紀初頭の２時期あるとされる「伊賀焼弥助窯」出土例と形体がよく似ている

(図８・11)。

土鍋の焼台は、時代とともに形の変化が見られる18世紀初頭の堂島蔵屋敷１号窯では、「紐を巻き上げて逆台形で筒状の焼台を作り下端に円錐ピンを付けたもの」であったのが、18世紀末には本調査トレンチ出土品に類似した「轆轤成形の焼台に円錐ピンを付けた」形体のものになる。さらに天保３年(1832年)から明治20年(1887年)にかけて稼動した飯能焼原窯や19世紀前半に稼動した大和町宮床窯では「製作工程がより簡素化された五角形の花弁状焼台」が現れる(図11)。

匣鉢(40)には幅3.0㎝で口縁から下方へ7.5㎝の長さの大きな抉りがある。これと共通する器形の匣鉢は、県内では「石塔窯」、県外では「伊賀焼弥助窯」、「飯能市飯能焼原窯」で出土している。石塔窯においては片口を40とほぼ同じ法量の大きな抉りのある匣鉢に入れて焼成した例がある(図11)。本遺跡では石塔窯出土例と同様の片口は出土していない。

以上製品・窯道具の比較と調査トレンチ出土品の一部に素焼きの行平や土鍋の焼台等18世紀末～19世紀初頭と見られる遺物が含まれていることから、「地山窯」の年代の下限が1820年代～1830年代まで下がることが分かる。「地山窯」生産品は素焼製品と焼成不良品の事例から行平・香炉・鉢・深鉢・土鍋等５種があげられ、ワドチに付いた底部の痕跡から筒碗・丸碗や土鍋・土瓶も生産された可能性が指摘できる。

４．おわりに

本報告を執筆するにあたり、財団法人栗東町文化体育振興事業団には資料の閲覧・実測・撮影の許可をいただいた。また同財団佐伯英樹氏、成安造形大学深尾秀一講師には貴重なご助言をいただいた。また資料の実測は財団法人滋賀県文化財保護協会小澤晃子調査補助員(実測を実施した平成11年には京都橘女子大学文化財学科３回生)が行った。記して謝意を表したい。

(いながき　まさひろ：企画調査課主任)

註

(1)　『文化財発掘調査　1990年度　年報』財団法人栗東町文化体育振興事業団

(2)　『竹ノ鼻遺跡－蒲生郡蒲生町石塔－』滋賀県教育委員会　財団法人滋賀県文化財保護協会　1998

(3)　金子智子・前川嘉宏・竹内英昭「阿山町丸柱所在の弥助窯について」『研究紀要　第８号　－創立10周年記念論文集－』三重県埋蔵文化財センター　1999

(4)　『漆原Ｃ遺跡発掘調査報告―近世信楽焼窯跡の調査報告―』信楽町教育委員会　1993

(5)・竹ノ鼻遺跡　註(2)
・伊賀焼弥助窯　註(3)
・『大阪市福島区　堂島蔵屋敷跡』財団法人大阪市文化財協会　1999
・『飯能の遺跡(27)　飯能焼原窯跡　第１・２次調査』飯能市教育委員会　1999
・大和町教育委員会「宮床窯跡」『東洋陶磁学会　第28回大会研究発表資料集　東北の近世城館出土陶磁』東洋陶磁学会　東北歴史博物館　2000

(6)　註(2)～(5)参照

(7)　堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報Ｉ』東京大学埋蔵文化財調査室　1996年度

(8)　白神典之・増田達彦「堺における近世の陶磁器と土器について」『関西近世考古学研究Ｉ』関西近世考古学研究会　1991

(9)　『大阪市福島区　堂島蔵屋敷跡』財団法人大阪市文化財協会　1999

編集後記

今回は８編を数える多数の論文を掲載することができました。内容も、縄文時代から近世までと各時代の研究論文のほか、普及事業についての報告もあり、バラエティに富んだものとなりました。

埋蔵文化財を取り巻く環境は年々厳しくなってきていますが、我々の調査・研究の成果をわかりやすくお届けできるよう、今後も様々な形で努力していきたいと思います。

（T．K）

平成13年（2001年）３月

紀　要　第14号

編集・発行　財団法人　滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本　冨士出版印刷株式会社
大津市札の辻４－20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668